

原風景としての幼児期 ——保育者養成課程学生の思い出し記録から——

栗原 泰子*・野尻 裕子**

Research of the Infancy as Original Scenery
From Analysis of the Record Which Remember a
Childcare Person Training Course Student' Past

Yasuko KURIHARA and Yuko NOJIRI

要 旨

南(1995)は子ども時代の意味を、様々な人生の局面において回帰するものとしてその重要性を指摘している。特に保育者を志す学生が記憶にとどめている子ども時代の原風景を辿っていくことは、これからの自身が行う保育の根幹を探ることになるのではないだろうか。そこで本研究では、将来保育者を志望する学生の幼児期の思い出し記録の分析を通して、幼児期に体験した遊びや幼児期に出会った保育者像を明らかにすることで、保育者養成の教育内容に示唆を得ようと考えた。

具体的には(1)遊びの思い出(2)保育者像の特徴を自由記述文より明らかにし、本学学生の学習課題について検討する。

調査の結果、遊びの思い出の特徴に関しては「造形的遊び」に関する回答が、最も多いという結果であった。また個々の回答数と遊び内容の記述の関係からは、①低回答群は「造形的遊び」の割合が高く、②高回答群は「遊具遊び(大)」の割合が高いという結果であった。更に③高回答群は「伝承遊び」「自然、水遊び」の割合が高い結果も得られた。

次に保育者像に関しては、性格に関する記述が最も多く、中でも「やさしい」イメージを持っているものが半数以上であるが、一方「厳しい・怖い」というイメージを抱いているものも少なくない。また一般的な保育者像として定着している「ピアノが上手で活動的である」という印象を持っているものも多い。

これらのことから、保育者を志望する学生は遊びのイメージとして主体的な取り組み(自由遊び)が思い出となっているといえる。主体的な活動経験は次の発達ステージへの基礎となることから、保育者としてその経験の重要性を意識化することが必要であるといえる。更に保

*教授 幼児教育学

**講師 幼児教育学

育者養成と重ねて考えた時、如何に子どもが主体的に活動できる環境を保障できるか、このことが保育者として非常に重要であることを再認識しなければならないといえるだろう。

キーワード：原風景、遊びの思い出、保育者像、主体的取り組み

【はじめに】

保育者を志望する学生は、その志望動機に幼児期の幼稚園や保育所での思い出を語るものが多い。また、保育者を幼少期から夢として抱き続けてきた学生も少なくない。幼児期に自分が経験したことが学生の志望に少なからぬ影響をおよぼしているとしたら、どのようなことが印象深く学生の記憶の中に残っているのだろうか。

寺本（1990）は、子ども時代の遊びの原風景画の調査から、子ども世界の様々な空間や経験が持つ意味や役割の存在を示唆している。また南（1995）は、「生涯発達の中で、子ども時代がもつ意義や意味を問うとき、この時期に経験された事柄が将来の知的・情緒的発達にどのような影響をもたらすであろうかという長期的な展望とともに、生涯のさまざまな時期に折りに触れて回想され、再体験される『原風景としての子ども時代』の位相を忘れてはならないと述べている。また、この原風景は「生涯のさまざまな局面で回想され、回帰される『こころのふるさとあるいは根拠地』として大切な意味をもつという視点が開かれてくる」として、子ども時代の体験の持つ意味について、単に知的発達を促すといったとらえ方ではなく、一人の人間が一生を通じてさまざまなシーンで行きつ戻りつする心的世界であり、ある種のよりどころとなっている可能性を指摘している。このことは、保育者を目指す学生にとって大変重要な意味を持つものと考ええる。

そこで、将来保育者を志望する学生の幼児期の思い出し記録の分析を通して、幼児期に体験した遊びはどのようなものがあつたのか、幼児期に出会った保育者像を明らかにすることによって、保育者養成の教育内容等に関する示唆が得られると考えた。

【研究目的】

- (1) 保育者を目指す学生が幼児期（幼稚園・保育所）の原風景の中から遊びの思い出として記述したものを抽出分析し、その特徴を明らかにする。

- (2) 保育者を目指す学生の原風景として残っている保育者像の特徴を明らかにする。

【研究方法】

質問紙調査（幼児期の思い出を自由記述）

調査対象：K大学幼児教育学科2年次生77名

調査時期：2003年5月1日

質問内容：幼児期の思い出を、以下の項目ごとに自由記述する。

(1) 遊びについて

(2) 保育者について

分析方法：自由記述された文章をその記述内容によって分割し、キーワードを抽出し、分析項目にそって分類した。

分析にあたっては、(1) 遊びについて、(2) 保育者についてのそれぞれについて、その特徴を明らかにした。

【結果及び考察】

1. 遊びの思い出の特徴について

遊びの思い出に関しては、学生の自由記述の文章から649の遊びが抽出された。

(1) 遊び記憶の量的分析

回答数の中で最も多いものは30（N=1）、少ないものは2（N=3）、平均は一人当たり8.4であった。回答数別の割合をみると、2～10の解答が全体の7割以上を占めている（表1）。

(2) 遊び記憶の内容分析

遊びの内容を分析するにあたり、調査結果から12の項目に分類した（表2）。

①全体の傾向

最も多い回答は「造形的遊び」で全体の16.2%の学生が回答した。その具体的な内容としては「お絵かき」「折り紙」「粘土」がその大半を占めていた。これらの活動は幼児が一人で行うことが可能なもので、このことから、ものを作り上げるという遊びの過程で自分と向き合う

〈表1 回答数 (N = 77)〉

回答数	人数	%
2～5	23	29.9
6～10	32	41.6
11～15	17	22.0
16～20	4	5.2
21～25	0	0
26～30	1	1.3
合計	77	100.0

〈表2 遊びの内容〉

遊び	回答数	%
固定遊具遊び	75	11.6
遊具遊び(大)	69	10.8
遊具遊び(小)	33	5.1
砂, 泥遊び	60	9.2
鬼遊び	78	12.0
ごっこ遊び	79	12.2
造形的遊び	105	16.2
自然, 水遊び	48	7.4
ゲーム	12	1.8
伝承遊び	44	6.8
その他	42	6.5
不明	4	0.6
合計	649	100.0

作業が行われており、内面化しやすいために、思い出として多く記述されたのではないかと考えられる。2番目に多い「ごっこ遊び」(12.2%)では、「ままごと」以外のさまざまなごっこ遊びが回答されており、個々の経験の多様さを物語っている。これらは、実生活の中で経験したことをごっこという形で遊びの中に展開することが考えられ、そのために個人差が大きく、多様な展開となったと思われる。「鬼遊び」(12.0%)では、「〇〇鬼」というような記述ではなく、単に「鬼ごっこ」という回答が多かった。特別なルールのある鬼遊びよりも思い出の中に深く残っているという結果であった。鬼ごっこの構成要素である「追うー追われる」という行為が彼女たちの記憶の中にとどめられているために、このような結果となったのではないかと考えられる。「固定遊具」(11.6%)では、ブランコが一番多く挙げられ、ついで鉄棒、すべり台、ジャングルジムなどが挙げられた。これらの固定遊具は、彼女たちの幼児期には、「幼稚園設置基準」で設置することが義務づけられていたものが多く、通っている施設が異なっても共通して設置されていたことから、このような結果となったものと思われる。近年安全上の理由からブランコの使用が制限される現場が多いといった報告があるが、子どもの遊びの思い出を作り上げるものという点からも再度検討が必要なのではないだろうか。

全体的にみると、ここで語られている遊びは、自由な遊びの場面でのものが多かった。一斉

保育の中での活動は彼女たちにとっては、遊びとしての思い出に繋がりにくい面もあり、子どもの意識の中に課業であるというようなものが形成されたために、遊びの記憶から除外されていることも考えられる。保育現場において子どもたちは遊ぶことで学ぶことの重要性が言われているが、一斉保育の中で子どもたちの意識の中に遊びながら学んでいるという思いを形成させる必要性を感じる。

② 回答数と遊び内容の関連

回答数と遊び内容の項目との関連をみるために、平均（8.4）よりも回答の多いグループ（高回答群：N = 29）と少ないグループ（低回答群：N = 48）に分けて比較を行った（表3，表4）。その結果、それぞれのグループの項目比率には次のような3つの特徴が見られた。

●低回答群は「造形的遊び」の割合が高い。

全体の傾向の所でもふれたように、「造形的な遊び」の特徴として、形あるものの作成過程に思い出として残りやすい要因があると考えられる。回答数の少ない低回答群にもこれらの回

〈表3 回答総数が平均以下の遊び内容〉
(N = 48)

遊び	回答数	%
固定遊具遊び	30	11.3
遊具遊び(大)	21	7.9
遊具遊び(小)	14	5.3
砂，泥遊び	26	9.8
鬼遊び	32	12.1
ごっこ遊び	34	12.8
造形的遊び	54	20.4
自然，水遊び	17	6.4
ゲーム	6	2.3
伝承あそび	14	5.3
その他	17	6.4
不明	0	0.0
合計	265	100.0

〈表4 回答総数が平均以下の遊び内容〉
(N = 29)

遊び	回答数	%
固定遊具遊び	45	11.7
遊具遊び(大)	48	12.5
遊具遊び(小)	19	4.9
砂，泥遊び	34	8.9
鬼遊び	46	12.0
ごっこ遊び	45	11.7
造形的遊び	51	13.3
自然，水遊び	31	8.1
ゲーム	6	1.6
伝承あそび	30	7.8
その他	25	6.5
不明	4	1.0
	385	100.0

答が多いという結果からも、このことは「造形的遊び」の大きな特徴だと考えられる。一人で没頭することができる「造形的遊び」は全体の回答数が少ない学生の中にも思い出として定着しやすいという傾向があることがここから読みとれる。

●高回答群は「遊具遊び（大）」の割合が高い。

「遊具遊び（大）」の具体的な遊びとしては、「乗物遊び」「ボール遊び」「縄跳び」などが挙げられた。高回答群は、遊びの思い出が物（遊具）と結びついて、具体的な内容が記述されたと考えられる。つまり、回答数の多さをもたらすもののひとつに、どれだけ物とかかわったかといったことがこの結果と関連するものと考えられる。

●高回答群は「伝承遊び」「自然、水遊び」の割合が高い。

特に「自然、水遊び」の項目では、「遊び」というよりは、日常の園生活の中での発見から発展したと思われるものが多く含まれている。このことは、自ら積極的に環境とかかわり、面白さ、不思議さを体感することが、子どもの「遊びの思い出」として深く心に残るという側面を象徴していると言えるだろう。

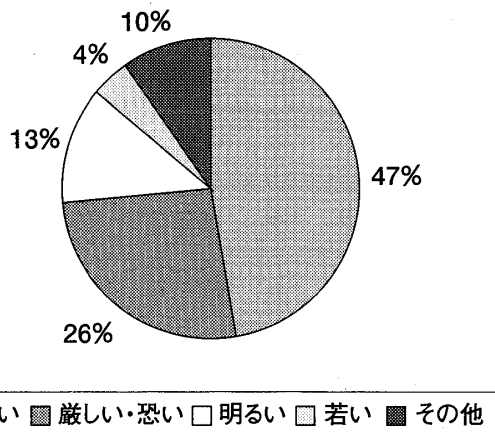
以上のことから、自由記述の文章の内容に示された回答の数、つまり量的な側面からだけでは、実際の遊び経験の量や内容を判断することは難しいと言えるが、上述の「高回答群」「低回答群」の間には、明らかにその遊びの記憶に違いが見られた。「高回答群」がそれだけ幼児期の思い出を鮮明に詳細に記憶しており、「低回答群」は、強く印象に残った記憶のみを回答しているとも言いきれない。幼児期から十数年が経過しても記憶に残っているということは、場面として想起された遊びの思い出の数々は少なくとも内面化された個人の遊びに対するイメージを象徴するものと言えるだろう。保育現場で実際の保育に当たる際、学生が幼児期に体験した遊びは、その保育内容や方法に大きな影響を与えることが考えられる。これらのことから学生の経験の個人差を考慮した授業内容が保証される必要があるといえる。

2. 保育者像の特徴

(1) 保育者自身について

①性格面に関するもの

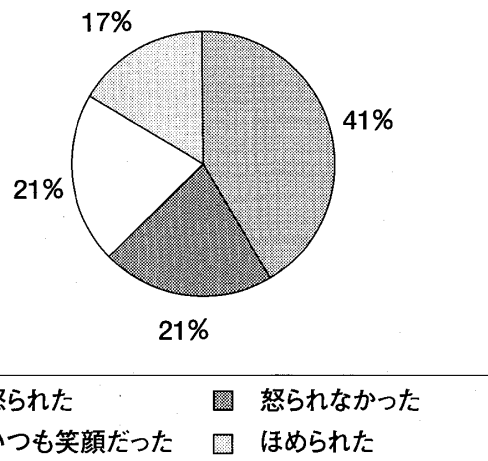
保育者の性格面に関する記述は全体で72あった。そのうち半数近くは、「優しい」という記憶である。これは、保育者に対して一般に抱かれるイメージと同じものであった。「優しい」以外にも「明るい」「若い」などというイメージも同様である。ここで問題となるのは、学生達が第2位に「厳しい・怖い」というイメージを挙げたということである。保育者＝「厳しい・怖い」という記憶を持ち続けて成長してきた学生に対してどのような援助ができるかという点を考えなければならないだろう。



〈図1 保育者の性格面に関するもの〉

②行動面全体の印象

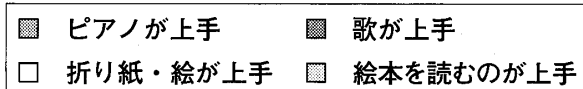
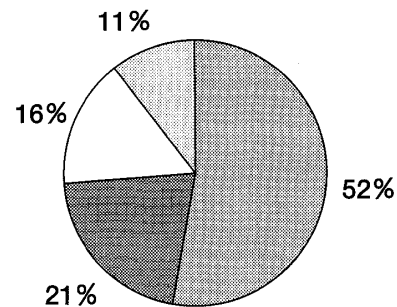
これは、保育者が指導している場面を想起して記述された内容である。ここでは、「怒られた」という記憶が強烈な印象として残っていることがわかる。ここで分類されている中で、この項目のみがマイナスのイメージであり、その他はプラスのイメージとなっている。これは①の「厳しい・怖い」というイメージとも連動しており、怒られたから保育者に厳しいイメージをもったということも考えられる。



〈図2 保育者の行動面全体の印象〉

③保育技術面

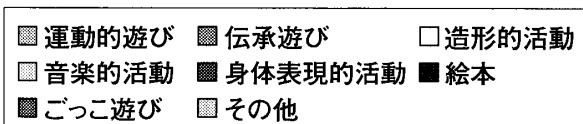
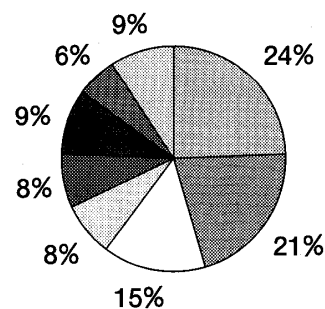
学生達にはピアノや歌が上手な保育者が記憶に残っているようである。このことが影響を及ぼし、実際に保育実習に行く前の段階で、音楽的に不得意な感覚を持つ学生の実習に対する不安感へとつながっていくものと考えられる。



〈図3 保育者の技術面に関すること〉

(2) 活動の記憶

保育者とともに行った行動については、53の記述が見られた。一番多かったのは「運動的活動」であり、ついで「伝承あそび」「造形活動」となっている。これらに共通しているのは、身体活動を伴ったものであり、いわば動的な活動であるということである。幼児期に行った活動は、動作性の記憶として残り、想起されやすいと思われる。現在の保育内容の領域で考えてみると、「健康」「表現」の2つの領域に偏りがあり、「言葉」や「人間関係」に関連する



〈図4 一緒に行った活動の記憶〉

ものも少数であるが見られる反面、「環境」に関する記述は「その他」の中に1名「花や草の名前を覚えてくれた」がみられるのみであった。動作性の記憶が残りやすいことを考えると、自然の中での活動は多く行われているが、その中での保育者の意識が科学的な活動へのつながりへ向かっていないことが原因としてあるのではないかと考える。

(3) 指導との関連での記述

保育者が自分に対して行った指導に関して記述をしている学生が19名おり、一緒に遊んだり、歌を歌ったり、絵本を読んできたというように、活動をしながらも、自分自身に注目してくれたことが記憶によく残っているようである。

それに対して、厳しい指導は「お弁当・給食」「子ども会」や「運動会」などの場面に限定されていた。「お弁当・給食」などは、好き嫌いが許されない場面として共通して語られており、放課後まで残されたり、廊下に出され、保育室に入れてもらえなかったというような極めてクリアで詳細な記憶として残っている。また、行事に関しても、非常に厳しい指導が行われていたという記憶が残っているようである。これらについては、保育者を養成する上で、検討していかなければならない問題と考える。なぜなら、自分が経験したのと同じ様な指導を子どもたちに対して行ってしまう可能性が考えられるからである。

幼児期の記憶は、その後の生活の中で、修正されたり、親などによって強化されたりすることが考えられる。それでも、保育者を目指す学生にとっては、幼児期の思い出は大きな影響を与えていることが考えられ、学生個々がもつ既存の体験の中で培われたこれらの記憶についても考慮した指導が養成校においてもなされる必要があると考える。また、行事などに向けた全体的な指導の必要は保育現場において不可欠なものであるが、これらをどのように行っていくべきかという指導法についても考えていかなければならない。そして、幼児個々に対する細かな指導法についても考えていく必要があると思う。

また、科学に関する指導は、特に女子学生があまり得意な意識をもっていない分野である。昆虫や動物や土などに触れない、あるいは好きではないという学生も多い。科学的な探究心をどう培っていくべきかということも課題の1つであろう。

保育者養成を考えた場合には、子どもの記憶にプラスのイメージとして残るような、個々への対応を密に行っていくような指導法に関する教育を考えていく必要がある。

<参考文献>

- ・栗原泰子・野尻裕子「原風景としての保育者像—幼児期の思い出の記述より—」日本乳幼児教育学会第13回大会発表論文集 2003
- ・南博文『講座発達心理学第3巻 子ども時代を生きる—幼児から児童へ』金子書房 1995
- ・野尻裕子・栗原泰子「幼児期の遊びの思い出とその特徴—保育者養成課程学生の思い出し記録から—」日本乳幼児教育学会第13回大会発表論文集 2003
- ・寺本潔『子ども世界の原風景』黎明書房 1990